

7. 藤布

藤布とは、私たちにも親しみの深い、初夏に紫色の花を咲かせる「ふじ」の繊維で織った布のことです。木綿が普及する江戸時代以前は、麻や楮（こうぞ）などの繊維とともに、重要な衣服の材料でした。近代以降も、高価な木綿が流通する中で、農村や漁村で織り続けられました。出雲名物番付に「上講武藤布」、と出てきており、自家用に織られるだけでなく、販売、流通もしていたと考えられます。現在織る人はいませんが、鹿島町上講武で織られた布や、地機（じばた）、製作記録などが残されており、全国的に貴重です。



藤の花

江戸時代 藤布は全国どこでも作られていた衣料・編物材料で、島根県内でも各地で作られていたことが伝えられています。原料は木綿や麻のように栽培されたものではなく、近隣の山中で自然の藤を採集し、手順を踏みながら繊維に加工していきました。藤はつる植物ですので、有用な樹木に巻き付いて厄介者扱いされることもあり、その採集は歓迎されたとも伝えられています。自給自足的な側面が強い繊維ですが、集落によっては多量の製品を作り、町場や近隣の村々に販売するほど盛んだったところもあります。鹿島町上講武地区はその一つで、名物番付に載るくらいですから、相当の生産量があったのでしょう。



藤の細い繊維で燃った糸

藤布で作った衣服は、丈夫で軽く、山仕事にはぴったりだったそうです。藍などで染めて麻糸で縫っています。現在残されている仕事着は、前で合わせて帯で締める膝までの長い上着と、紐で締める膝下までの股引（ももひき）で、柔道着に似ています。それに腕から手の甲を覆う手甲（ておい）と脛につける脚絆（きゃはん）も一緒に身に着けました。「いばら」や「かたら」をはじく、つよい服だったそうです。

また蒸籠（せいろう）で米などを蒸すときに、その下に敷く「敷布（しきの）」が大量に作られ、松江の町など各地に出荷されました。油屋の油絞りや米屋のコメうむしにも使われたので、たくさんの需要がありました。

ほかに、魚を捕る地引網や船曳網などの網の中央につける鋸網（もじあみ）が盛んに作られました。重くて水に強く、網目がよらない藤布は、網の底袋やタモに向いていて、漁業が中心の各浦々に供給されました。

よく利用された三種類のほかに、丈夫な藤布は、米袋や弁当箱、蚊帳（かや）、畳縁（たたみべり）など多様な用途に用いられました。簡単な縫物は各家庭や商家でもできましたので、反物としても出荷されたようです。



藤布で裁縫した作業着一式
左：上着・手甲、右：股引

その後 明治になっても、藤布の需要は衰えることはありませんでした。島根県でも山間部を中心に、藤蔓（ふじつる）の繊維を使った織物が作られていました。しかし近代化がすすみ、麻や木綿などの栽培植物の繊維が広く用いられるにつれて、藤布を作るところは減少の一途をたどりました。そうした状況でも、上講武地区では大正、昭和の時代になっても藤布を盛んに作っていたのです。なぜなら、ほかの地区では自給的な生産にとどまっていたが、上講武では古くから製造販売をしてきたからです。ほかの布よりも丈夫で、製品によっては藤布が最適なものもあったため、注文に応じるままに生



地機（じばた）での藤布織（左）と高機（たかはた）での藤布織（右）



敷布（しきの）
（中心付近が蒸した米の痕跡で変色している）

産を続け、地区全体で商売として取り組んできたのです。特に蒸籠に敷く敷布の需要は、衣服や網が他の素材に入れ替わっても、新しい蒸し器が出現する戦後まで、細々ながらも続いていました。

明治30年ころ、上講武では30戸が藤布生産を行っていて、藤蔓の採取は男の仕事、製糸・機織りは女の仕事として性分業があり、女の仕事も工程ごとに分業が行われていたといいます。村内には世話役がいて、各地からの注文を受けると各戸に振り分け、鋳網を売りさばいていました。やがて敷布が中心になると、行商を行うこともあり、一時は松江に特売店もできていたようです。やがて、生活様式の変化や化学繊維の普及のなか、上講武の藤布生産も下火になっていきました。

現存する藤布材料・製品・道具 昭和39年、文化庁から依頼を受けた島根県教育委員会では、上講武に残された藤布紡績習俗について調査を行いました。すでに藤布の生産はほとんど行われていませんでしたが、7人の技術伝承者（藤布作りの経験者）が健在で、藤蔓の採取から内皮の処理、糸づくり、織り上げまでの工程と、それに使う道具類の記録がとられたのです。そして昭和42年3月1日に「出雲の藤布紡織習俗」として国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に登録されました。

調査後、藤布製品や材料、糸などの製品や、糸づくり、織り上げの道具類は佐太神社に残され、現在は松江市立鹿島歴史民俗資料館で保管されています。道具ではやはり、藤布を織る機織り機が圧巻です。椅子に座って腰の位置で機織りをする「高機（たかはた）」と、地べたに座って腿の位置で織る「地機（じばた）」双方が保



鹿島歴史民俗資料館に展示されている地機

存されていて、資料館の2階に展示されています。特に鋳織を行う地機は、全国的に見ても珍しいといわれています。経系（たていと）を反物の横幅いっぱい、一本一本結び付けて、経系を一本ごとに上下に分けて横系を通す作業を繰り返す仕事は、とても大変なものだったと想像できます。製品も先に紹介した作業着一式や反物、敷布、網、タモ網など貴重な品が残され、一部展示もされています。

歴史（そもそも） 藤布の歴史はとても古く、『古事記』（712年編纂）にも藤蔓で衣服を編んだ記述があります。また弥生時代の遺跡から出土した例もあり、二千年以上の歴史があることがうかがえます。

（丹羽野 裕）

📖【参考文献】

- ・石塚尊俊1964「山陰における藤布技術伝承」『暮らしの歴史』2005年刊
- ・奥原国雄『美しき工芸技術－島根の風土が生んだもの－』島根県文化財愛護協会1970年刊
- ・『紡織習俗II（島根県・鹿児島県）（無形の民俗文化財記録第26集）』文化庁文化財保護部 1981年刊
- ・『コズミックワンダーと工藝ばんくす舎 ノノ かみと布の原郷』2021年 石見美術館展覧会 https://www.grandtoit.jp/special/homeland_of_kami_and_cloth